
四人の手練れ達

ミント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四人の手練れ達

【Nコード】

N5380X

【作者名】

ミント

【あらすじ】

ミネルバ・マクゴナガルによって甦らされたあの4人が過去に戻って活躍します（本当に活躍するかどうかは定かではありませんが）。親世代からはたまた孫世代まで、もう一度人生をやり直す4人の話です。因みに、キャラは大崩壊する予定なので、苦手な方はお気を付け下さい。また、かなりコメディ要素が強くなりそうです。

プロローグ（前書き）

作者はド素人です。超初心者なので、物語はめちゃくちゃになる可能性があります。

どうか、作者が無い脳みそから絞り出す駄文にお付き合い下さい。感想、誤字脱字、クレーム、リクエスト等随時受付中です。

プロローグ

プロローグ

「…………ル、ゴドフィル、早く起きて」

ぺちぺちぺちぺち……

（起きるの面倒臭いな……）

「これじゃ駄目かな……もっと強くしてみよう」
べちべちべちべち

（……痛い……けど眠いし起きたくない……）

「しょうがないなあ、もう」

ゴンッ

「痛えな！何だよ朝から気持ちよく眠ってる人の顔を叩いたり殴ったり……」

俺は殴った張本人を睨み付ける。

「ロウエナ！？どうしたんだ！？久し振りだな！それにしても珍しいな、お前人のこと起こさない主義だったろ？」

「これ。あと、もう昼だから。いくら天国にいるったって限度があるわ」

そう言っただけで彼女が俺に押し付けたのは一通の手紙だった。
封筒の表には

『ゴドリック・グリフィンドール様』

差出人は……と、

『ミネルバ・マクゴナガル』

プロローグ（後書き）

初めまして、ミントです。

本文では分かりにくいと思うので、一応説明しておきます。

主人公：ゴドリック・グリフィンドル

叩いてた人：ロウエナ・レイブンクロー

時期：7巻の闘いの約1年後

こんなところでしょうか

あ、因みに、作者はたまにどかっと思うタイプなので、更新はすぐ遅くなると思います

では

第1章

1998年7月。in天国。

俺に一通の手紙が届いた。

「マクゴナガルって・・・確か現校長だよな？」

一年程前、ハリー・ポッターとかいう奴が『例のあの人』・・・ヴォルデモートを倒した。その闘いの際、当時校長だったセブルス・スネイプが死亡し・・・彼も今は俺の家の近所で暮らしている・・・副校長だったマクゴナガルが代わった・・・はず。

「そうよ。下界から直接飛んで来たみたいで、フクロウが気を失っていたから・・・」

さつきから抱えてた茶色いボサボサしたものはフクロウだったんだな・・・

「手紙、開けないの？」

あ、忘れてた。

ベリッ。

中からは4、5枚の羊皮紙が出て来た。

俺は内容に目を走らせる。

「何て書いてあった？」

「それよりもヘルガとサラを呼ぼう」

「ん、分かった」

俺達はそれぞれ2人に守護霊をとばす。

「あと、着替えていいか？サラに馬鹿にされるからな」
「OK。あー、キッチンで勝手に食べていい？」
「別にいいぞ。腐ってるやつもあると思うけどな」

「どうした？」

「何があつたの？珍しいじゃない」
2人は殆ど同時に駆け込んで来た。
俺は3人に手紙の説明をする。

「さつきマクゴナガルから手紙が届いた。内容はーホグワーツの入学希望者が増え過ぎて、寮がパンク状態だそうだ。ハッフルパフなんか特に酷くて・・・場合によっては2人で1つのベッドとか・・・」

ヘルガは目を見開いて聞いている。

「だから、新しい学校を造るんだそうだ。ホグワーツの分校として建設予定地まで決まったそうだが、ホグワーツにかけられている保護呪文が分からないらしい・・・。だから、マクゴナガルは俺達に代わりをして欲しいと」

「・・・ということは、つまり我々にー」
「甦れってこと」

「でもそれって禁じられてるんじゃない？」
「ま、バレなきゃ大丈夫じゃない？」
「同じこと、マクゴナガルも書いてるぜ」

「ーマクゴナガルって本当に教師なのか？」

「・・・」

「まあ、ダンブルドアも怪しかったな、その点に関しちゃ」

「・・・」

(・・・は・・・)

第1章（後書き）

今回の最初の所で分かったと思いますが、ゴドリック達は天国に居る設定です。

と言っても、もう戻る予定はありません。

まあ、彼らの場合、天国に行けるのか怪しいですが、そこはスルーでお願いします（汗）

更新ですが、これから私には「中間テスト」という地獄が待っています。

そのため、次はいつ更新出来るか定かではありません。

最悪3、4週間後になるかもという感じなので・・・

その間にストックをいっぱい書いておくつもりです。あ、なんか言ってることが支離滅裂ですね（-。 - ;

どうか、この駄作者を生温かい目で見守ってやって下さい

第2章

バチン

校長室に姿現しをした俺達はマクゴナガルの方を向いた（ホグワーツには姿現し出来ないと認識されているらしいが、一応裏技がある。）。

「よく来て下さいました」

マクゴナガルは椅子を薦め、全員が席に落ち着くと、再び口を開いた。

「皆さんに来て頂いたわけは、手紙の通りです。ただ、1つ私から提案があります」

「・・・提案？」

「千年も経てば、相当時代も変わります。近頃はGPSなどもありますし、荒廃した城が見つければマグル達が研究のために入り込むでしょう。ですから、もう一度保護魔法の見直しを此処、ホグワーツで行い、新校舎と合わせて、ホグワーツにも保護魔法をかけると良いと思います。どうでしょう？」

マクゴナガルは俺達の反応を眺めていた。

サラが口を開く。

「良いと思うが、ホグワーツは隠し部屋が多いから10年位・・・それに、何もせずにいると生徒に怪しまれるから生徒か教師のふりをして20年・・・いや30年位かかるかな・・・でも、それでも大丈夫か？」

「これは一刻も早く解決しなくてはいけない問題ですよ？そんなに時間はかけられませんよ？」

「それなら大丈夫です」

マクゴナガルの目がキラツといたずらっぽく輝いたのは気のせいだろうか。・・・うん、気のせいだと願おう。

マクゴナガルは机を探って砂時計のようなものを取り出した。

「それは、まさかー」

「逆転時計です」

「でも、それって確か3年前にハリー達が全部壊したんじゃないー」

「取って置いたんです!」

・・・残念だが、さっきのは気のせいでは無かったようだ・

「こんな素敵なものを全て壊すなんて・・・と思った私は、ポッター達が壊す寸前に5個保護しました」

（（（5個も持ってたのか・・・）））

「こんなに素晴らしい発明をみすみす失うなんて、もったいな過ぎるでしょう!？なんていったって・・・」

俺の前に居るマクゴナガルは、逆転時計を片手に、その美点を挙げ続けていた。その顔からはー俺としてはとても残念なことにー厳格な雰囲気は消え失せ、目をーあのお茶目で有名だったーダンプルドアのようにキラキラさせ、頬は上気していた。

耐えかねたサラが言う。

「・・・まあ、もとの話に戻りましょう。我々は30年程前に戻ると?」

「そうです。皆さんには生徒になってもらい、それから教師になってもらえば良いと思います」

「異論はないな。3人はどう思う?」

「良いと思う」

「別に・・・」

「良いんじゃない?」

「じゃあ、そうしましょう」

「あの・・・」

その時、マクゴナガルが言いにくそうに話し始めた。

「あの・・・一つお願いがあるのですが・・・」

「何ですか？」

マクゴナガルは一息ついてから言った。

「セブルス・スネイプについて調べて頂きたいのです」

第2章（後書き）

ゴドリツク：あれ？と思った方も多いと思いますが、3、4週間あくかもとか言って置いてこの駄作者は何血迷ってんだか、翌日に1000字越えの次話を投稿しました

駄作者：血迷ったって・・・だって、投稿したい衝動を抑えられ無かったんだもん！！

ゴ：何で？

駄：だって・・・ウフフッ。

ゴ：ごめんなさい、この駄作者は昨日アクセス解析を初めて見て、なんと60人以上の方に読んで頂いていることを知って舞い上がってるんです

駄：あ、バラしたな

とにかく、皆さんありがとうございます！

昨日余りにも嬉しくて跳ねていたら母に変な顔をされました（苦笑）

ゴ：そりゃあキモいでしょう

携帯端末で何か見た後、ニタニタしながら跳ね始めたら

駄：うぐっ

ゴ：因みにさっき見たら、78人の方が見て下さっていると分かりました！

では今回はここまで

ゴ、駄：ありがとうございます！

10 / 16

脱字の訂正をしました

すみませんでした

今後さらに気を付けるようにします
が、もしも誤字脱字等ありましたら感想のところに書いて頂けると
嬉しいです

あと、大崩壊キャラが出ましたね。第1号：マクゴナガル先生。私、
マクゴナガル先生は大好きです。良い人じゃないですか。だから、
キャラ達が怖がってるのを読んでなんでえーと思ってました（苦笑）

第3章

「・・・セブルス・スネイプ・・・を？」

「で、でも彼はもう死んだのでは？」

「だからこそ、です」

先程の表情とはうって変わり、マクゴナガルは強張った表情を浮かべている。

「私は、スネイプのことを死喰い人達から仕向けられたスパイだと思いついていました。ですが、それだけでは片づけられないことが色々と出て来たのです」

それからマクゴナガルは、1年前のあの闘いの後で回収したスネイプの死体に無数の深い牙の跡があったこと、その跡に付いていた唾液がおそらく蛇のものであること、そこからスネイプはナギニに襲われて死んだのだろうということを話した。

「ここまでくると、怪しくなるのは何故ヴォルデモートが彼を殺したのかです。用がなくなっただけから殺されたのか、ヴォルデモートの事情を知り過ぎてしまったとか、スネイプがスパイではなかった場合、それがばれて殺されたのか、などいくらでも理由はあると思います。だから、彼がスパイなのかどうか、彼は死喰い人側の人間だったのか、不死鳥の騎士団側の人間だったのか調べて頂きたいのです。もし、彼がこちら側の人間だったのなら、決して死なせる訳には・・・死なせる訳にはいかないのです・・・」

「・・・はつきり言って面倒臭い。いや、天国でのらりくらりと暮らして居たいという訳では決してない。が、そんなことを調べ始めたらあの闘いに俺達も巻き込まれることになる。出来ればそんな危険なことはしたくない。」

それに、メチャクチャな人生を送った俺は、天国に行った後、『生まれ変わったら、何も無いような平凡な人生を送ろう』と心に決めていたのだ。

（その決意をこんなところで妨害されるのは絶対に嫌だ！！）

だから、断ろー

「分かりました。やりましょう」

（どこの馬鹿だ！？そんなことぬかすのは！）

周りを見ると、サラがこちらを見て微笑んでいた。

「もちろん、やるだろ？」

嫌だ、と言いつうになって気付く。

背中に・・・杖を当てられている。

（・・・くそっ・・・）

「ああ、もちろん」

俺はそう答えた。

他の2人も頷く。

「良かった」

そう言つて笑つたサラの顔が、俺には悪魔に見えた。

向こうでの段取りなどを決めた後、向こうへ行つてからの学年を決めることになった。先程の話し合いで1学年に1人ずつ入ることになったのだ。1学年にいきなり4人も入ったら、今のホグワーツのよ
うな状況になりかねないからだ。

「・・・どうやって決めるの（か）？」

「そこは・・・」

俺達にいきなりふられ、口ごもるマクゴナガル。

しばらく考えてから

「あの・・・じゃ、じゃんけんが良いと・・・」

（よっしゃああああああああああ！

やっぱり頭の良い人は俺の考えを分かってくれるんだ！）

「・・・」

向こうの隅では、黒い雲にすっぽりと包まれた3人が絨毯の毛をいじっていた。思ったたら、3人揃ってこっちへやって来た。

「・・・じゃんけんでは、絶対に勝ってやる（わよ）！！！！！！

！！！！！！

（こ、怖い・・・）

「せえの！」

「・・・最初はパー（グー）、じゃんけんポイ！！！！」

（あれ？なんか違うような・・・）

ロウエナはチョキ、ヘルガもチョキ、サラもチョキ・・・・・・・・・・
つて

ええええええええええええ

俺の手を見ると、しっかり5本の指が開いていた。

「・・・ま、負けた・・・・・・・・・・」

「・・・やったあ！！！！」

黒い雲にすっぽりと包まれた俺は（以下略）

向こうの方では、3人がハイタッチをしていた。

そのあとのじゃんけんで、1位はロウエナ、2位はヘルガ、3位はサラになった。

選べるのは

？スネイプの1学年上

?

？スネイクと同学年

?

？スネイプの1学年下

?

？スネイプの2学年下

?

因みに右の番号は俺の希望順。

ロウエナ「じゃあ、？」

ええええええ。いきなり第一希望取られた・・・

へルガ「ん、かな」

サラ「じゃあ？」

（そうかそうか。　ってちよつと待てよ。　まさか・・・）

残ってんのって？ じゃん！

まさかの第四希望！？）

「……分かったよ……俺……？……かあ……」

「いいじゃんいいじゃん。あのスネイクと一番お近づきになれる学年だぜ？」

「……だからやだつたのに……」

「ん？なんか言ったか？」

サラの笑顔が（どす黒いオーラを出しながら）迫ってくる。

「な、な、な、何にも言っ
て無いよ！」

「そうか。それなら良いけど。」

「では、これをどろろで」

マクゴナガルが1人に1つつ逆転時計を配る。

「私は、45年前のダンブルドアに会って、貴方方のことを話しておきます」

そう言ってマクゴナガルは消えた。

「じゃあ、俺達も行くか」

後に残ったのはペチャクチャ喋る歴代校長達だけだった。

第3章（後書き）

ゴ、駄：皆さんありがとうございます！

遂にユニークで100人超えました！

今見たら167人の方に読んで頂いていると分かりました！

駄：わーいわーい

やったあ

万歳！！！！

ゴ：駄作者は宴会を始めてしまったので・・・
んと、あつという間に150人も超えてしまつて脳味噌が付いて行
つてません。

とにかく、感謝感謝です

あ、あと本編の方にツツコミたいところが・・・
っただけ創設者達自己主張強いんだよ！それに相当幼稚だよね！？

駄：それって君も含まれてるんだよ、ゴドリツク君。あ、あとまた
大崩壊キャラが出ましたね。？ゴドリツク？ロウエナ？ヘルガ？サラ
あくまでも彼らは私のイメージを大袈裟に表現してるだけです。で
も、セリフとかは私考えて無いんです。

ゴ：は？どうやって書いてんの？

駄：そりゃあんたらが勝手に喋り始めるんでしょうが！

ゴ：あ、そ。すみませんね、ご迷惑をお掛けしまして。では、さよ
なら

次は更新遅くなると思います
では

第4章（前書き）

遅れてしまつてすみません><

第4章

今、俺がいるのは1967年の校長室。

着いてから俺はしばらくふらふらしていた。

何故かって？逆転時計を1回ひっくり返すと1時間前に戻る。俺が来たのは31年前。何回ひっくり返したかというと、ざっと数えて・
・うん、ざっとなんかじゃわかんない。

とにかく、俺は超高速で逆転時計をひっくり返し・・・じゃない、振りまくってかれこれ数十分。何回冬が来たのか、窓の外側目を凝らして数え、振るのをやめた。

落ち着いてから周りを見回すと、右側にダンブルドアが座っていた。

「ミネルバの言う通り、今年も来たのう。外見から予想する限り、ゴドリック・グリフィンドールかの？」

「そうだ。今は何月何日だ？」

「1967年ーリーリー達が入学する年じゃよー7月22日じゃ」

「そうか。・・・それにしても、さつきから周囲からの視線が突き刺さる気がするんだが」

「気のせいじゃろう」

ぬけぬけと言うダンブルドア。だが、実際に後ろを振り向くと、杖を構えた多勢の魔法使いと魔女達がいた。

(・・・この狸爺)

「みんな、大丈夫じゃよ。去年言っただじやろう、これから4年間は1人ずつ創始者が入学すると」

「さすが杖をしまう人々。おそらく教師だろう。」

(てか、俺を攻撃出来なかったことをそんなに残念そうにするなああああああ)

何人かの中に1人、見知った顔を見つける。

「マクゴナガルだ。」

先程まで話していた彼女よりも圧倒的にシワと白髪が少なーーーーゴホン。

威圧的な雰囲気は昔から変わらないらしく、きりつと頭の上で髪を結っている。

「顔を見たの初めて・・・グリフィンドールさんですよネ?」

さっきダンブルドアが言ってただろっというツツコミはスルーして・・・と。ぼそぼそと床を見ながら男が問うてくる。確か・・・・・・・・・ビーンズだっけか?

《違うよっ!!!てめえ記憶力悪すぎるだろっ!ビーンズだよ!なに豆にしちゃってんの!?!》

(そういえば聞いたことあるような・・・ってあんた誰!?)

《あなたの脳内ツツコミ要員です》

(なんじゃそりゃ!?!・・・おっと、現実に戻らなきゃ)

「ああ、そうだが」

ざわざわとどよめく教師達。誰だかよく分からないが、1人の男の教師に腕を掴まれる。

「後でサインを下さい!!!!!」

「私も」「あ、私も欲しい」「我輩も」「わしも欲しい」

(・・・鬱陶しい)

俺はこういう風に英雄扱いされるのが嫌いだ。助けを求めてダンブルドアの方に振り向く。

「いいのう。わしも後でもらうとするかの」

あろうことが、ダンブルドアは目をキラキラさせていた。

(お前もかつ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!)

俺は自分が燃え尽きたように感じた。それはもう真っ白に……。
 ……なんて、『明日のジョー』ごっこをしている暇は無いので、現
 実に戻る。

（今日の俺、現実逃避しすぎだな・・・）

「いいですよ。今度時間のある時にでも」

とびっきりの笑顔「営業用」を浮かべて答える。

「やったあ！」

(・ ・ は あ ・ ・)

「よし、1番上等な色紙と羽根ペンを買って来なくては!」

「額縁を買わなきゃ！」

「文字を点滅させる呪文を練習しよう！」

バタバタと殆どの教師が校長室を出て行く。

• • • • •

マクゴナガルは目を丸くして突っ立っていた。

「ミネルバ、申し訳ないが、ちよつと席を外して貰つてもいいかの。2人で話したいのじゃ」

「分かりました。ところで、グリフィンドールさん、あなたは何処に泊まられるのですか？ 空き教室ならいくつか有りますが……」

「いや、自分の部屋があるので、そっちに泊まります」

「そうですか。では、お休みなさい」

マクゴナガルは部屋を出て行った。

ダンブルドアは俺に向き直る。

「お主が来たのは、ホグワーツの保護魔法を調べるためじゃったな？」

その後、一通り確認をする。

「――うむ。こんなところかの。ところで、お主、偽名は考えてあるかね？」

(あ・・・)

俺はすっかり忘れていた。

「顔も体格もどうにかせねばならんの」

(うぐっ)

「どんな感じにしたいのじゃ？」

(えーと・・・)

「こんな感じかの？」

ボンッ

俺の頭は赤毛のアフロになっていた。

ぐちゃぐちゃに絡まっていて、すぐく見苦しい。

「爺、てめえ何考えてんだよ！ダサ過ぎだろ？」

「そつかの？」

十数分後、俺は明るい茶色の髪に薄い緑の目

をした。自分で言うのもなんだが、イケメンになっていた。

(どうせ顔選べるんだったらやっぱイケメンがいいでしょ。)

「うむ。良し良し。次は名前じゃな」

ダンブルドアはいそいそと嬉しそうに羊皮紙の束を出して来た。

「こんなのはどうかの？」

「嫌、なんかダサイ」

「これは？」

「やだ」

「不満が多いの。これはどうじゃ？」

「いいかも。うん・・・って、それ女の名前じゃねえか

！何だよキャサリンって！！ざけんな！」

数十分後、俺の名前はフェルデナンド・アイアンブリッジになり、ダンブルドアの体には痣とたんこぶが増え、2人はそれぞれ自分の

部屋へ向かう。

「「おやすみなさい」」

そう言つて、俺は私部屋へ向かう。もちろん隠し部屋なので、行くのは面倒臭い。

「部屋の中はどうなってるのかなつと・・・」

ドアを開けて中に入る。

ガチャツ

「うわあああああああああ」

ボタン

ドアの内側は・・・見たくない。

何故かよく分からないが、四方の壁に天井まで詰まっていた大量の蔵書が下に落ち、巨大な山を形造っていた。

ベッドは・・・埋もれて分からない。

こうして、俺のホグワーツ最初の夜は、徹夜で本整理という結果に終わった。

第4章（後書き）

駄：はあ。やっと次話投稿出来ました。

ゴ：なかなか進まなかったのは誰のせいだっけねえ

駄：すいませんでしたあ！！！！

許してえええ！！！！

ゴ：こんなアホですが、どうかお付き合い下さい

駄：誰がアホじゃーうぎゅっ！？

ゴ：あんたに決まってるだろーが

駄：はい、認めます

ゴ：・・・・・・では、さようなら

駄：・・・ちよっと、勝手に終わらせないで＼＼ぎゃあっ

ゴ：さようなら（＾・＾）／

10 / 26

昨日新しく小説を始めました。

「異分子」ってタイトルです。

エレニア記って検索すれば一発で出てくる・・・

・・・はず（汗）

暇で暇でしょうがないって方は（こんな駄文
でもいいのなら）見て下さいな

10/28 緊急事態です！！

というより、私が馬鹿なだけですが（苦笑）
詳しくは活動報告で。

あ。リンクのはり方分かりましえん。
ごめんなさい。

とにかく、小説存続の危機なので（大袈裟だろ
byゴドリック）ご協力お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5380x/>

四人の手練れ達

2011年11月15日15時37分発行